

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531180

研究課題名(和文)「現代語」の成立と消滅に見る「言語の教育」の課題と言語力育成への視座

研究課題名(英文) Issues in Language Education and the Outlook for Fostering Linguistic Competence as seen through the Establishment and Disappearance of Current Language

研究代表者

八木 雄一郎 (YAGI, Yuichiro)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：80571322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：平成元年版高等学校学習指導要領(国語科)において新設された「現代語」が学校現場に浸透せず短命に終わった要因について戦後の「言語の教育」に関する言説の歴史の変遷についての文献調査、「現代語」教科書および教材の言語学的分析、海外における「言語の教育」と日本の国語科における「言語の教育」の比較調査からの分析を試みた。そしてその知見をふまえて、日本の国語教育における「言語の教育」の特質と課題についての検証を行った。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed the factors resulting in the failure of Current Language to establish a foothold in schools and its subsequent quick death. Current Language was a new subject introduced in 1990 with the promulgation of The Course of Study of High School (Japanese Language). The methodology for this research involved the following: 1) a literature review of the historical changes in the discourse on Language Education in the post-war period; 2) a linguistic analysis of Current Language textbooks and teaching materials, 3) a comparative survey of Japanese Language Education in Japan and Language Education in other countries. Based on the resulting findings, the features of and problems surrounding Language Education in the Japanese language curriculum were verified.

研究分野：国語科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：言語の教育 キーコンピテンシー 現代語 国際研究者交流 イギリス

## 1. 研究開始当初の背景

国語科教育が「言語の教育」であることは、戦後の学習指導要領の中で繰り返し確認されてきた。特に昭和 50 年代以降、そのことはより強調されることになり、平成 20 年版の学習指導要領解説の中にも「言語の教育としての立場を一層重視し…」と記されている。折しも OECD による PISA 調査や「キー・コンピテンシー」の明示の影響により、「言語の教育」の重要性が強調される今日において、国語科教育の、つまり「言語の教育」のあり方に関して、これまで以上の注目が集まっているのが昨今の状況といえる。

しかし一方で、戦後の国語科教育の歴史を俯瞰したとき浮かび上がってくるのは、国語科が「言語の教育」であることを強調し、具体的に何らかの施策をとったとき、それが必ず成功しないという逆説的な事実である。その代表的事例が平成元年版の「現代語」である。「現代語」は言語に関する知識や文法、文字などをその内容とする「言語事項」を一科目として独立させたものであり、「言語の教育としての国語科教育の…(略)…旗手としての役割を担った科目」として注目された科目だった(大平浩哉(1989)「新学習指導要領のなかの『現代語』」『日本語学』vol.8,1989年5月,p.4)。しかし、「現代語」は、科目および教科書が学校現場にほとんど浸透せず、次の学習指導要領改訂(平成 11 年)の際に、新設の「国語表現」に統合され、科目としてはわずか 1 期で姿を消すことになる。

この「現代語」の低迷と消滅について言及している先行研究は複数挙げられる。例えば、宮本克之(1997)は、高校へのアンケート調査を基に「カリキュラム上の問題」と「教員の意識の問題」について考察している(『現代語』はなぜ現場に浸透しないのか』『日本語学』vol.16,1997年5月)。また幸田国広(2010)は「教科構造史」の観点からの分析を行っており、従来から高校国語科が「弱点」としてきた内容を一つの科目としてまとめたところに「現代語」の問題があったことを指摘している(「教科構造史からみた『現代語』 精選と多様化の時代における『国語科』像の検証」『月刊国語教育研究』No.461,2010年9月)。しかし宮本、幸田をはじめとする先行研究には、以下のような課題が残されていた。

歴史的研究の立場からの包括的な問題の把握

現代言語学の観点からの「現代語」教科書の分析

海外における「言語の教育」との比較研究以上 3 点の課題が残されていることにより、「現代語」および「言語の教育」の問題は、それが問われることの今日的な意味と将来的な展望についての自覚が明確にならないまま研究が進められているという現状があった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、平成元年版高等学校学習指導要領(国語科)において新設された「現代語」が科目および教科書として成立するまでの過程と、それが学校現場に浸透せずに短命に終わった要因を複眼的なアプローチにより解明することである。それを通して、日本の国語科教育における「言語の教育」の特質と課題を明らかにし、世界的な視野で学力の問題(および言語力の育成)を考えることが求められるこれからの時代において、日本の国語科における「言語の教育」はどのようにあるべきかということについての検証を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は以下の 3 点のアプローチによって行った。

戦後の「言語の教育」に関する言説の歴史の変遷についての文献調査

学習指導要領の改訂年次を区切りとし、順次調査を進めながら、戦後の「言語の教育」の思潮の変遷と「現代語」の位置づけを明らかにする。

「現代語」教科書および教材の言語学的分析

「現代語」の教科書として教科書検定を通過した計 6 社(東京書籍、三省堂、明治書院、角川書店、尚学図書、第一学習社)の教科書について、現代言語学の知見に基づく分析を行う。

海外における「言語の教育」と日本の国語科における「言語の教育」の比較調査

伝統的に「言語」と「文学」を分化させたカリキュラムによる教育を行っているイギリス・アメリカの学校の状況を調査し、言語教育のあり方についての、日本との共通性や相違点を明らかにする。

## 4. 研究成果

戦後刊行された複数の国語教育関連雑誌(『言語生活』『月刊国語教育研究』『読書科学』『国語科教育』『教育科学国語教育』『月刊国語教育』)を悉皆的に調査し、学習指導要領の改定を区切としながら「言語の教育」についての思潮がどのような変遷をたどってきたのかを考察した。その中で、1960(昭和 35)年の高等学校学習指導要領の公布前後から各雑誌における「言語の教育」特集が増加し始めること、いわゆる「文学教育」への傾斜への警鐘として「言語の教育」が語られるようになってきたことを指摘した。ここから、日本の国語教育においては、本来は相補関係であるはずの「言語」と「文学」が、ほとんど対立関係のような図式で描かれてきたという状況が明らかになってきており、それが「現代語」を含めた日本の「言語教育」の停滞の一要因となっていることを仮説として示した。

また、教科書調査においては教科書検定を通過した「現代語」教科書6点について分析を行い、現代言語学の成果が「現代語」にどのように反映されているのかについて検証を行った。本研究においては、Hymes に代表されるコミュニケーション論を導入し、その分析を試みた。その結果、Hymes はコミュニケーション能力とは「知識」と「運用」(Knowledge and use) から成るとするのに対し、「現代語」は知識面により大きな比重をかけた内容となっていることが指摘された。これはそもそも、学習指導要領の「現代語」の規定において、「身に付ける」「(語彙を)豊かにする」「理解を深める」という、知識を身につけるというニュアンスの表現が多く用いられ、「考えて(略)話す」という、運用を念頭においているような文言は一箇所にしか見られないことに端を発するものであることを明らかにした。

さらに、海外調査においては、言語教育の充実において、子どもをどのような人格として育成するのかという課題認識に立ち、これを解明するための切り口として、イングランドの初等学校における PSHE 実践事例を詳細に報告し、そこで根底に敷かれている学力観、授業観を考察した。また、言語教育の手段としての教科書・教材のデジタル化が海外でどのように進展しているか、その実態と成果、及び今後への課題をアメリカ・ニューヨーク市の学校での取材を通して検証した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

藤森裕治, 『更級日記』の対称性 空間論的文責による古典文学教材研究, 国語科教育, 査読有, vol. 75, 2014, pp. 88-95

藤森裕治, イギリスの「きく」学校に学ぶ, 指導と評価, 査読無, vol. 60, 2014, pp. 9-11

藤森裕治, すぐれた論理は美しい, 信州国語教育, 査読無, vol. 85, 2014, pp. 19-34

藤森裕治・新井浅浩, イギリスの読書教育, 読書科学, 査読有, vol. 56, No. 1, 2014, pp. 1-13

藤森裕治, 苦しさ = 楽しさとしてのことばの学び, 指導と評価, vol. 59, 査読無, 2013, pp. 10-12

藤森裕治, 説明的文章における四人の「筆者」, 日本語学, 査読無, vol. 32, No. 15, 2013, pp. 14-23

岩男考哲, 「ときたら」構文と「といったら」構文の評価的意味, 信州大学教育学部研究論集, 査読有, vol. 6, 2013, pp. 63-74

藤森裕治, 読解力再考, 日本語学, 査読無, vol. 30, 2012, pp. 76-87

藤森裕治, 美しい論理力, 信濃教育, 査読無, vol. 1507, 2012, pp. 10-19

藤森裕治, 続美しい論理力, 信濃教育, 査読

無, vol. 1508, 2012, pp. 10-19

藤森裕治, 「至高・判断・表現」の学力としての「書く能力」, 日本語学, 査読無, vol. 30, 2011, pp. 52-61

藤森裕治, 国語科でコミュニケーション力を育てる, 指導と評価, 査読無, vol. 57, 2011, pp. 9-12

岩男考哲, 売買時のコミュニケーションの地域的特色 長野と京都の比較を通して, 信大国語教育, 査読無, vol. 21, 2011, pp. 1-12

〔学会発表〕(計21件)

岩男考哲, 引用形式が名詞をつなぐ表現の研究 「という」「といった」と「とか」をめぐって, 日本語文法学会, 2013/12/1, 早稲田大学

八木雄一郎, 説明的文章の学習指導の向かうべきところ, 飯山市城北中学校区学力向上秋の研修会(招待講演), 2013/10/29, 長野県飯山市城北中学校

岩男考哲, 引用形式が名詞をつなぐ表現の研究, TLM 研究発表会, 2013/9/13, 神戸女学院大学

藤森裕治・新井浅浩, イギリスの読書指導, 日本読書学会, 2013/8/4, 全林野会館

藤森裕治・八木雄一郎・濱田秀行・秋田喜代美・肥田美代子, 子どもの頃の読書が成人現在の読書に与える影響: 世代間差に着目して, 日本読書学会, 2013/8/4, 全林野会館

藤森裕治, 交流の学習指導について, 文教大学国語国文学会, 2013/8/3, 文教大学

藤森裕治, イギリスの「きく」学校に学ぶ, 東京都青年国語教育研究会(招待講演), 2013/8/1, フロラシオン青山

八木雄一郎, 国語科教育の「これまで」と「これから」, 長野市上水内中学校教科会国語部会(招待講演), 2013/8/1, 長野市吉田公民館

藤森裕治, 言語活動の充実, 長野県図書館協会専門研修, 2013/7/31, 長野県立図書館

岩男考哲, 内容節の内容とは何か, TLM 研究発表会, 2013/7/14, 神戸女学院大学

藤森裕治, すぐれた論理は美しい, 日本国語教育学会長野地区研究集会(招待講演), 2013/7/12, 飯田市立飯田東中学校

藤森裕治・濱田秀行・八木雄一郎, "子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究 成人読書調査", 子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究, 2013/2/23, 東京大学

岩男考哲, メタ用法と指定叙述文, TLM 研究発表会, 2013/1/26, 神戸女学院大学

八木雄一郎, 国語科における音読の位置, 飯山市学力向上事業研修会(招待講演), 2012/11/20, 飯山市立木島小学校

八木雄一郎, 新学習指導要領の方向性とその意味, 諏訪国語教育学会夏期研修会(招待講演), 2012/8/1, 諏訪市立永明小学校

岩男考哲, 「言う」の条件形を用いた文の広がり, 引用・話法の会, 2012/3/18, 大学共同利用施設 UNITY

岩男考哲, 構文環境における新たな意味的  
連関の発生, TLM, 2011/9/25, 兵庫県中央労働  
センター

八木雄一郎, 新しい学習指導要領を読み解  
く, 飯山市学力向上夏の研修会(招待講  
演), 2011/8/2, 飯山市立飯山小学校、同東小  
学校

藤森裕治, 単元的発想で言語力を育てる,  
東京都青年国語教育研究会(招待講  
演), 2011/7/9, 東京都港区立青南小学校

藤森裕治, 単元的発想で育てる感性的思考  
力, 日本国語教育学会(招待講演), 2011/6/17,  
長野県上田市立第四中学校

②藤森裕治, キーコンピテンシーとしての伝  
統的な言語文化, 全国大学国語教育学  
会, 2011/5/28, 京都教育大学

〔図書〕(計4件)

藤森裕治, 東洋館出版社, すぐれた論理は  
美しい Bマップ法によることばの学び  
, 2013, 212

望月善次・鶴田清司・藤森裕治・八木雄一  
郎 他 70名, 東洋館出版社, 国語科教育学研  
究の成果と展望 , 2013, 574 (467-474,  
521-528)

田近洵一・鳴島甫・藤森裕治・西一夫 他  
29名, 東洋館出版社, 中学校・高等学校国語科  
教育法研究, 2013, 208(46-51)

〔その他〕

研究代表者ホームページ URL :  
[http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/  
ja.WaShjVkh.html](http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.WaShjVkh.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

八木 雄一郎 (YAGI, Yuichiro)  
信州大学・教育学部・准教授  
研究者番号 : 80571322

### (2) 研究分担者

岩男 考哲 (IWAO, Takanori)  
信州大学・教育学部・准教授  
研究者番号 : 30578274

藤森 裕治 (FUJIMORI, Yuji)  
信州大学・教育学部・教授  
研究者番号 : 00313817